

第 A 章 集合と位相の復習

A.1 集合の復習

To be written
章 0 で書いた.

A.2 ベクトル空間と線型写像の復習

定義 A.1. (1) $n \in \mathbb{N}$ とする. 空でない集合 $\mathbb{X} \subset \mathbb{R}^n$ が実ベクトル空間であるとは $\forall \mathbf{x}, \mathbf{y} \in \mathbb{X}$ と $\forall c \in \mathbb{R}$ に対して

$$\mathbf{x} + \mathbf{y} \in \mathbb{X} \quad \text{かつ} \quad c\mathbf{x} \in \mathbb{X}$$

をみたすときである.

(2) $k \in \mathbb{N}$ とする. $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_k \in \mathbb{X}$ と $c_1, c_2, \dots, c_k \in \mathbb{R}$ を用いて定義されるベクトル

$$c_1\mathbf{x}_1 + c_2\mathbf{x}_2 + \dots + c_k\mathbf{x}_k$$

を $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_k$ の線型結合という. $S \subset \mathbb{R}^n$ とし, E を S の元の線型結合のすべてから成る集合としたとき S は E を張るといい, $E = \text{span}(S)$ と書く.

(3) ベクトル $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_k \in \mathbb{R}^n$ から成る集合が独立であるとは, $\forall c_1, c_2, \dots, c_k \in \mathbb{R}$ に対して

$$c_1\mathbf{x}_1 + c_2\mathbf{x}_2 + \dots + c_k\mathbf{x}_k = \mathbf{0}_n \Rightarrow c_1 = c_2 = \dots = c_k = 0$$

をみたすときをいう. そうでないとき $\{\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_k\}$ は従属であるという. ただし $\mathbf{0}_n^\top = \underbrace{(0, 0, \dots, 0)}_{k \text{ 個}}$ である.

(4) 実ベクトル空間 \mathbb{X} が r 個の独立なベクトルからなる集合を部分集合として持ち, $(r+1)$ 個の独立なベクトルの集合を部分集合として持たないとき \mathbb{X} の次元は r であるといい, $\dim \mathbb{X} = r$ と書く.

(5) 実ベクトル空間 \mathbb{X} の独立な部分集合 S が \mathbb{X} を張るとき集合 S は \mathbb{X} の基底という.

注意 A.2. 実ベクトル空間 \mathbb{R}^n を考える.

$$e_i = \underbrace{(0, \dots, 0)}_{i-1 \text{ 個}}, \underbrace{1, 0, \dots, 0)}_{n-i \text{ 個}}^\top \quad (i = 1, 2, \dots, n)$$

とおく. $S := \{e_1, e_2, \dots, e_n\}$ は \mathbb{R}^n の基底となる. この集合 S を \mathbb{R}^n の標準基底とよぶ. □

定理 A.3. $r \in \mathbb{N}$ とし, \mathbb{X} を実ベクトル空間とする. ベクトル空間 \mathbb{X} が \mathbb{X} の r 個のベクトルで張られるとき $\dim \mathbb{X} \leq r$ となる.

Proof. Rudin (1976, p.205) を参照のこと. □

系 A.4. $\dim \mathbb{R}^n = n$.

Proof. $\text{span}(\{e_1, e_2, \dots, e_n\}) = \mathbb{R}^n$ なので $\dim \mathbb{R}^n \leq n$ となる. しかし $\{e_1, e_2, \dots, e_n\}$ は独立なので $\dim \mathbb{R}^n \geq n$ となる. よって定理は証明された. □

定理 A.5. \mathbb{X} を実ベクトル空間とし, $\dim \mathbb{X} = n$ とする. 以下が成立する.

(1) E を \mathbb{X} の n 個の異なる元から成る集合とする. このとき

$$\text{span}E = \mathbb{X} \Rightarrow E \text{ は独立.}$$

(2) \mathbb{X} は基底を持ち, すべての基底は \mathbb{X} の n 個の異なる元から成る.

(3) $r \in \mathbb{N}$ を $1 \leq r \leq n$ とし, $\{y_1, y_2, \dots, y_r\} \subset \mathbb{X}$ は独立とする. このとき \mathbb{X} は $\{y_1, y_2, \dots, y_r\}$ を含む \mathbb{X} のベクトルから成る基底を持つ.

Proof. Rudin (1976, p.206) を参照. □

定義 A.6. \mathbb{X} と \mathbb{Y} を実ベクトル空間とする. 写像 $T : \mathbb{X} \rightarrow \mathbb{Y}$ は線型であるとは

$$T(x_1 + x_2) = T(x_1) + T(x_2), \quad T(cx) = cT(x), \quad (\forall x_1, x_2, x \in \mathbb{X}, \forall c \in \mathbb{R})$$

をみたすときをいう.

定理 A.7. \mathbb{X} を有限次元ベクトル空間とする. 線型写像 $T : \mathbb{X} \rightarrow \mathbb{X}$ が 1 対 1 であるための必要十分条件は

$$\mathbb{X} = \text{range}(T) := \{T(x); x \in \mathbb{X}\}$$

が成り立つときである.

Proof. Rudin (1976, p.207) を参照. □

定義 A.8. $\mathbb{X}, \mathbb{Y}, \mathbb{W}$ を実ベクトル空間とする.

(1) $\mathcal{L}(\mathbb{X}, \mathbb{Y})$ を \mathbb{X} から \mathbb{Y} への線型写像すべてから成る集合とする. 特に $\mathcal{L}(\mathbb{X}, \mathbb{X})$ を $\mathcal{L}(\mathbb{X})$ と書くことにする. $\forall T_1, T_2 \in \mathcal{L}(\mathbb{X}, \mathbb{Y})$ と $\forall c_1, c_2 \in \mathbb{R}$ に対して

$$(c_1T_1 + c_2T_2)(\mathbf{x}) = c_1T_1(\mathbf{x}) + c_2T_2(\mathbf{x}) \quad (\forall \mathbf{x} \in \mathbb{X})$$

と定める. すると $c_1T_1 + c_2T_2 \in \mathcal{L}(\mathbb{X}, \mathbb{Y})$ となる.

(2) $T \in \mathcal{L}(\mathbb{X}, \mathbb{Y})$ と $S \in \mathcal{L}(\mathbb{Y}, \mathbb{W})$ とする. この時 T と S の積 ST を T と S の合成写像で定める. すなわち

$$(ST)(\mathbf{x}) := S(T(\mathbf{x})) \quad (\forall \mathbf{x} \in \mathbb{X})$$

である. すると $ST \in \mathcal{L}(\mathbb{X}, \mathbb{W})$ となる. $\mathbb{X} = \mathbb{Y} = \mathbb{W}$ のときでも ST と TS は一般には一致しないことに注意せよ.

(3) $m, n \in \mathbb{N}$ とする. $T \in \mathcal{L}(\mathbb{R}^n, \mathbb{R}^m)$ に対して T のノルム $\|T\|$ を

$$\|T\| := \sup_{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n; \|\mathbf{x}\|_{2,n} \leq 1} \|T(\mathbf{x})\|_{2,m}$$

で定める. ただし $\|\cdot\|_{2,n}$ は \mathbb{R}^n 上の Euclid ノルムである.

定理 A.9. (1) $T \in \mathcal{L}(\mathbb{R}^n, \mathbb{R}^m)$ のとき $\|T\| < \infty$ で

$$T: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^m$$

は一様連続である.

(2) $\forall T, S \in \mathcal{L}(\mathbb{R}^n, \mathbb{R}^m)$ と $\forall c \in \mathbb{R}$ に対して

$$\|T + S\| \leq \|T\| + \|S\|, \quad \|cT\| = |c| \|T\|$$

である. $\forall T, S, R \in \mathcal{L}(\mathbb{R}^n, \mathbb{R}^m)$ に対して関数

$$d: \mathcal{L}(\mathbb{R}^n, \mathbb{R}^m) \times \mathcal{L}(\mathbb{R}^n, \mathbb{R}^m) \ni (T, S) \longrightarrow d(T, S) = \|T - S\|$$

と定めると d は距離関数となる. すなわち, 任意の $S, T, R \in \mathcal{L}(\mathbb{R}^n, \mathbb{R}^m)$ に対して

$$(2a) \quad d(T, S) \geq 0; \quad d(T, S) = 0 \Leftrightarrow T = S,$$

$$(2b) \quad d(T, S) = d(S, T),$$

$$(2c) \quad d(T, R) \leq d(T, S) + d(S, R)$$

をみたま.

(3) $T \in \mathcal{L}(\mathbb{R}^n, \mathbb{R}^m)$ と $S \in \mathcal{L}(\mathbb{R}^m, \mathbb{R}^k)$ としたとき

$$\|ST\| \leq \|S\| \cdot \|T\|$$

がなりたつ.

Proof. Rudin (1976, p.208-209) を参照. □

定理 A.10. \mathcal{K} を \mathbb{R}^n から \mathbb{R}^n への可逆な線型写像すべての成す集合とする. このとき以下が成立する.

(1) $S \in \mathcal{K}$ と $T \in \mathcal{L}(\mathbb{R}^n)$ が

$$\|S - T\| \cdot \|S^{-1}\| < 1 \tag{A.1}$$

をみたすとき

$$T \in \mathcal{K}$$

である.

(2) \mathcal{K} は $\mathcal{L}(\mathbb{R}^n)$ の開部分集合で写像

$$\mathcal{K} \ni S \mapsto S^{-1} \in \mathcal{K}$$

は連続である.

Proof. (i) $\text{id}_n : \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n$ を恒等写像とすると, 定理 A.9(iii) から

$$1 = \|\text{id}_n\| = \|SS^{-1}\| \leq \|S\| \cdot \|S^{-1}\|$$

となる. よって, から $\|S^{-1}\| \neq 0$ であるので

$$\frac{1}{\|S^{-1}\|} \leq \|S\| < \infty$$

となる. このことを踏まえ

$$\|S^{-1}\| =: \frac{1}{\alpha} > 0$$

とおく. さらに $\|S - T\| =: \beta \geq 0$ とおく. 仮定 (A.1) から

$$\beta = \|S - T\| < \frac{1}{\|S^{-1}\|} = \alpha$$

となる. よって

$$\beta < \alpha$$

である. 一方, $\forall \mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$ に対して

$$\begin{aligned} \alpha|\mathbf{x}|_{2,n} &= \alpha|S^{-1}S(\mathbf{x})|_{2,n} \leq \alpha\|S^{-1}\| \cdot |S(\mathbf{x})|_{2,n} = |S(\mathbf{x})|_{2,n} \\ &\leq |(S - T)(\mathbf{x})|_{2,n} + |T(\mathbf{x})|_{2,n} \leq \beta|\mathbf{x}|_{2,n} + |T(\mathbf{x})|_{2,n} \end{aligned}$$

となる. この不等式から

$$(\alpha - \beta)|\mathbf{x}|_{2,n} \leq |T(\mathbf{x})|_{2,n} \quad (\forall \mathbf{x} \in \mathbb{R}^n) \quad (\text{A.2})$$

を得る. $\alpha - \beta > 0$ なので

$$\mathbf{x} \neq \mathbf{0}_n \Rightarrow T\mathbf{x} \neq \mathbf{0}_n$$

を得る. よって T は 1 対 1 となる. 定理 A.7 から

$$\mathbb{R}^n = \text{range}T$$

となるので $T \in \mathcal{K}$ がわかる. すべての $S \in \mathcal{K}$ に対して T は $\|S - T\| < \alpha$ をみたせば $T \in \mathcal{K}$ となる. このことから \mathcal{K} は $\mathcal{L}(\mathbb{R}^n)$ の開集合であることがわかる.

(ii) $S, T \in \mathcal{K}$ とする. (A.2) において $\mathbf{x} = S^{-1}\mathbf{y}$ と置き換えると

$$(\alpha - \beta)|S^{-1}(\mathbf{y})|_{2,n} \leq |SS^{-1}(\mathbf{y})|_{2,n} = |\mathbf{y}|_{2,n} \quad (\forall \mathbf{y} \in \mathbb{R}^n)$$

となる. よって $|\mathbf{y}|_{2,n} \neq 0$ のとき

$$\frac{|S^{-1}(\mathbf{y})|_{2,n}}{|\mathbf{y}|_{2,n}} \leq \frac{1}{\alpha - \beta}$$

となるので

$$\|S^{-1}\| \leq \frac{1}{\alpha - \beta}$$

を得る. 等式

$$S^{-1} - T^{-1} = S^{-1}(T - S)T^{-1}$$

と定理 A.9(ii) を合わせると

$$\|S^{-1} - T^{-1}\| \leq \|S^{-1}\| \cdot \|T - S\| \cdot \|T^{-1}\| \leq \frac{\beta}{\alpha(\alpha - \beta)}$$

を得る. $\beta \rightarrow 0$ とすれば $T \rightarrow S$ となるので写像 $\mathcal{K} \ni S \mapsto S^{-1} \in \mathcal{K}$ は連続となる. \square

A.3 多変数関数の微分と逆写像定理

定義 A.11. $E \subset \mathbb{R}^n$ を開集合とし, $\mathbf{x} \in E$ とし, $T : E \rightarrow \mathbb{R}^m$ を写像とする. 線型写像 $A : \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^m$ が存在して

$$\lim_{\mathbf{h} \rightarrow \mathbf{0}_n} \frac{|T(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x}) - A(\mathbf{h})|_{2,m}}{|\mathbf{h}|_{2,n}} = 0 \quad (\text{A.3})$$

が成り立つとき T は点 x で微分可能といい

$$\dot{T}(x) := A$$

と書く. T がすべての点 $x \in E$ で微分可能なとき T は E 上で微分可能という.

注意 A.12. (A.3) をみたく $A \in \mathcal{L}(\mathbb{R}^n, \mathbb{R}^m)$ は一意である. これを示すために $A_1, A_2 \in \mathcal{L}(\mathbb{R}^n, \mathbb{R}^m)$ があって A_1 と A_2 はともに (A.3) をみたくと仮定する. $B := A_1 - A_2$ とおくと $\forall \mathbf{h} \in \mathbb{R}^n$ に対して

$$\begin{aligned} |B(\mathbf{h})|_{2,m} &= |T(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x}) - A_2(\mathbf{h}) - \{T(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x}) - A_1(\mathbf{h})\}|_{2,m} \\ &\leq |T(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x}) - A_2(\mathbf{h})|_{2,m} + |T(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x}) - A_1(\mathbf{h})|_{2,m} \end{aligned}$$

となるので

$$\lim_{\mathbf{x} \rightarrow \mathbf{0}_n} \frac{|B(\mathbf{x})|_{2,m}}{|\mathbf{h}|_{2,n}} = 0$$

となる. $\mathbf{h} \neq \mathbf{0}_n$ を固定すると

$$\lim_{t \rightarrow 0} \frac{|B(t\mathbf{h})|_{2,m}}{|t\mathbf{h}|_{2,n}} = 0 \tag{A.4}$$

を得る. B の線型性から (A.5) の左辺は t と独立なので $B(\mathbf{h}) = \mathbf{0}_m$ ($\forall \mathbf{h} \in \mathbb{R}^n$) となる. よって $B = \mathbf{0}_{m \times n}$ がわかる. \square

定理 A.13. $E \subset \mathbb{R}^n$ を開集合とする. 写像 $T: E \rightarrow \mathbb{R}^m$ は点 $x_0 \in E$ で微分可能とし, $S: T(E) \rightarrow \mathbb{R}^k$ は点 $T(x_0)$ で微分可能とする. さらに写像 $R: E \rightarrow \mathbb{R}^k$ を

$$R(\mathbf{x}) := S(T(\mathbf{x}))$$

で定義する. このとき R は点 x_0 で微分可能で

$$\dot{R}(\mathbf{x}_0) = \dot{S}(T(\mathbf{x}_0)) \dot{T}(\mathbf{x}_0)$$

となる.

Proof. $\mathbf{y}_0 = T(\mathbf{x}_0)$, $A = \dot{T}(\mathbf{x}_0)$, $B = \dot{S}(\mathbf{y}_0)$ とおき

$$\begin{aligned} U(\mathbf{h}) &:= T(\mathbf{x}_0 + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x}_0) - A(\mathbf{h}) & (\mathbf{h} \in \mathbb{R}^n), \\ V(\mathbf{k}) &:= S(\mathbf{y}_0 + \mathbf{k}) - S(\mathbf{y}_0) - B(\mathbf{k}) & (\mathbf{k} \in \mathbb{R}^m) \end{aligned}$$

と定める. ただし $\mathbf{x}_0 + \mathbf{h} \in E$, $\mathbf{y}_0 + \mathbf{k} \in T(E)$ なるように \mathbf{h} , \mathbf{k} を定めた. このとき

$$|U(\mathbf{h})|_{2,n} = \epsilon(\mathbf{h})|\mathbf{h}|_{2,n}, \quad |V(\mathbf{k})|_{2,m} = \eta(\mathbf{k})|\mathbf{k}|_{2,m} \quad (\text{A.5})$$

$$\epsilon(\mathbf{h}) \rightarrow 0 (\mathbf{h} \rightarrow \mathbf{0}_n), \quad \eta(\mathbf{k}) \rightarrow 0 (\mathbf{k} \rightarrow \mathbf{0}_m) \quad (\text{A.6})$$

と書く. 与えられた $\mathbf{h} \in \mathbb{R}^n$ に対して

$$\mathbf{k} := T(\mathbf{x}_0 + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x}_0)$$

とすると

$$|\mathbf{k}|_{2,m} = |A(\mathbf{h}) + U(\mathbf{h})|_{2,m} \leq [\|A\| + \epsilon(\mathbf{h})] \times |\mathbf{h}|_{2,n} \quad (\text{A.7})$$

と

$$\begin{aligned} R(\mathbf{x}_0 + \mathbf{h}) - R(\mathbf{x}_0) - BA(\mathbf{h}) &= S(T(\mathbf{x}_0 + \mathbf{h})) - S(T(\mathbf{x}_0)) - BA(\mathbf{h}) \\ &= S\left(T(\mathbf{x}_0) + (T(\mathbf{x}_0 + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x}_0))\right) \\ &\quad - S(\mathbf{y}_0) - BA(\mathbf{h}) \\ &= S(\mathbf{y}_0 + \mathbf{k}) - S(\mathbf{y}_0) - BA(\mathbf{h}) \\ &= V(\mathbf{k}) + B(\mathbf{k}) - BA(\mathbf{h}) \\ &= V(\mathbf{k}) + B\left(T(\mathbf{x}_0 + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x}_0) - A(\mathbf{h})\right) \\ &= V(\mathbf{k}) + B(U(\mathbf{h})) \end{aligned} \quad (\text{A.8})$$

となる. (A.5) と (A.7) から $\mathbf{h} \neq \mathbf{0}_n$ のとき

$$\begin{aligned} \frac{|R(\mathbf{x}_0 + \mathbf{h}) - R(\mathbf{x}_0) - BA(\mathbf{h})|_{2,k}}{|\mathbf{h}|_{2,n}} &= \frac{|BU(\mathbf{h}) + V(\mathbf{k})|_{2,k}}{|\mathbf{h}|_{2,n}} \quad (\because (\text{A.8})) \\ &\leq \frac{\|B\|\epsilon(\mathbf{h})|\mathbf{h}|_{2,n} + \eta(\mathbf{k})|\mathbf{k}|_{2,m}}{|\mathbf{h}|_{2,n}} \\ &\leq \|B\|\epsilon(\mathbf{h}) + \frac{\eta(\mathbf{k})[\|A\| + \epsilon(\mathbf{h})]|\mathbf{h}|_{2,n}}{|\mathbf{h}|_{2,n}} \\ &\quad (\because (\text{A.7})) \\ &\leq \|B\|\epsilon(\mathbf{h}) + \eta(\mathbf{k})[\|A\| + \epsilon(\mathbf{h})] \end{aligned}$$

となる. $\mathbf{h} \rightarrow \mathbf{0}_n$ のとき $\epsilon(\mathbf{h}) \rightarrow 0$ かつ $\mathbf{k} \rightarrow \mathbf{0}_m$ なので $\eta(\mathbf{k}) \rightarrow 0$ となる. よって

$$\dot{R}(\mathbf{x}_0) = BA$$

がわかる. □

$E \subset \mathbb{R}^n$ を開集合とし, $T : E \rightarrow \mathbb{R}^m$ を写像とする. $\{e_1, e_2, \dots, e_n\}$ と $\{u_1, u_2, \dots, u_m\}$ を \mathbb{R}^n と \mathbb{R}^m の標準基底とする. 写像 T の成分は実数値関数 $T_i : E \rightarrow \mathbb{R} (i = 1, 2, \dots, m)$ を用いて

$$T(\mathbf{x}) = \sum_{i=1}^m T_i(\mathbf{x})\mathbf{u}_i \quad (\mathbf{x} \in E)$$

と表現できる. $\mathbf{x} \in E$ と $i = 1, 2, \dots, m; j = 1, 2, \dots, n$ に対して

$$(D_j T_i)(\mathbf{x}) := \lim_{t \rightarrow 0} \frac{T_i(\mathbf{x} + t\mathbf{e}_j) - T_i(\mathbf{x})}{t}$$

と定める. これを

$$D_j T_i = \frac{\partial T_i}{\partial x_j} \quad \mathbf{x} = (x_1, x_2, \dots, x_n)^\top$$

と書くことにする.

定理 A.14. $E \subset \mathbb{R}^n$ を開集合とし, 写像 $T : E \rightarrow \mathbb{R}^m$ は点 $\mathbf{x} \in E$ で微分可能とする. このとき偏導関数 $(D_j T_i)(\mathbf{x}) (i = 1, 2, \dots, m; j = 1, 2, \dots, n)$ は存在し

$$\dot{T}(\mathbf{x})(\mathbf{e}_j) = \sum_{i=1}^m (D_j T_i)(\mathbf{x})\mathbf{u}_i \quad (j = 1, 2, \dots, n)$$

と書ける. ただし $\{e_1, e_2, \dots, e_n\}$ と $\{u_1, u_2, \dots, u_m\}$ を \mathbb{R}^n と \mathbb{R}^m の標準基底である.

Proof. $j (1 \leq j \leq n; j \in \mathbb{N})$ を固定する. 写像 T は点 $\mathbf{x} \in E$ で微分可能なので

$$T(\mathbf{x} + t\mathbf{e}_j) - T(\mathbf{x}) = \dot{T}(\mathbf{x})(t\mathbf{e}_j) + \mathbf{r}(t\mathbf{e}_j),$$

$$\lim_{t \rightarrow 0} \frac{|\mathbf{r}(t\mathbf{e}_j)|_{2,m}}{t} = 0 \quad (\mathbf{x} + t\mathbf{e}_j \in E)$$

と書ける. $\dot{T}(\mathbf{x})$ の線型性から

$$\begin{aligned} \lim_{t \rightarrow 0} \frac{T(\mathbf{x} + t\mathbf{e}_j) - T(\mathbf{x})}{t} &= \lim_{t \rightarrow 0} \frac{\dot{T}(\mathbf{x})(t\mathbf{e}_j) + \mathbf{r}(t\mathbf{e}_j)}{t} \\ &= \lim_{t \rightarrow 0} \frac{t \dot{T}(\mathbf{x})(\mathbf{e}_j) + \mathbf{r}(t\mathbf{e}_j)}{t} \\ &= \dot{T}(\mathbf{x})(\mathbf{e}_j) + \lim_{t \rightarrow 0} \frac{\mathbf{r}(t\mathbf{e}_j)}{t} \\ &= \dot{T}(\mathbf{x})(\mathbf{e}_j) \end{aligned}$$

となる. これを T の成分で表現すると

$$\lim_{t \rightarrow 0} \sum_{i=1}^m \frac{T_i(\mathbf{x} + t\mathbf{e}_j) - T_i(\mathbf{x})}{t} \mathbf{u}_i = \dot{T}(\mathbf{x})\mathbf{e}_j$$

となる. よって $(D_j T_i)(\mathbf{x})$ は存在する. さらに

$$\sum_{i=1}^m (D_j T_i)(\mathbf{x}) \mathbf{u}_i = \dot{T}(\mathbf{x})\mathbf{e}_j$$

から

$$\begin{aligned} \dot{T}(\mathbf{x})\mathbf{e}_j &= \lim_{t \rightarrow 0} \frac{T(\mathbf{x} + t\mathbf{e}_j) - T(\mathbf{x})}{t} = \lim_{t \rightarrow 0} \sum_{i=1}^m \frac{T_i(\mathbf{x} + t\mathbf{e}_j) - T_i(\mathbf{x})}{t} \mathbf{u}_i \\ &= \sum_{i=1}^m (D_j T_i)(\mathbf{x}) \mathbf{u}_i \end{aligned}$$

を得る. □

このことより

$$\dot{T}(\mathbf{x}) = \begin{pmatrix} (D_1 T_1)(\mathbf{x}) & \cdots & (D_n T_1)(\mathbf{x}) \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ (D_1 T_m)(\mathbf{x}) & \cdots & (D_n T_m)(\mathbf{x}) \end{pmatrix}$$

と書ける. $\mathbf{h} = \sum_{j=1}^n h_j \mathbf{e}_j \in \mathbb{R}^n$ ($h_j \in \mathbb{R}; j = 1, 2, \dots, n$) に対して

$$\dot{T}(\mathbf{h}) = \sum_{i=1}^m \left\{ \sum_{j=1}^n (D_j T_i)(\mathbf{x}) h_j \right\} \mathbf{u}_i$$

となる.

定理 A.15. $E \subset \mathbb{R}^n$ を凸開集合とする. 写像 $T: E \rightarrow \mathbb{R}^m$ は E 上で微分可能とし, ある定数 $M > 0$ が存在して

$$\|\dot{T}(\mathbf{x})\| \leq M \quad (\forall \mathbf{x} \in E)$$

とする. このとき

$$|T(\mathbf{a}) - T(\mathbf{b})|_{2,n} \leq M |\mathbf{a} - \mathbf{b}|_{2,n} \quad (\forall \mathbf{a}, \mathbf{b} \in E)$$

が成立する.

Proof. $\mathbf{a}, \mathbf{b} \in \mathbb{R}^n$ を固定し

$$\mathbf{r}(t) := (1-t)\mathbf{a} + t\mathbf{b} \quad (t \in \mathbb{R})$$

と定める. E は凸集合なので

$$\mathbf{r}(t) \in E \quad (0 \leq t \leq 1)$$

となる. いま

$$S(t) = T(\mathbf{h}(t))$$

とおく. このとき定理 A.13 を用いると

$$\dot{S}(t) = \dot{T}(\mathbf{r}(t)) \dot{\mathbf{r}}(t) = \dot{T}(\mathbf{r}(t))(\mathbf{b} - \mathbf{a}) \in \mathbb{R}^m$$

を得る. よって

$$\|\dot{S}(t)\|_{2,m} \leq \|\dot{T}(\mathbf{r}(t))\| \cdot \|\mathbf{b} - \mathbf{a}\|_{2,n} \leq M \|\mathbf{b} - \mathbf{a}\|_{2,n} \quad (\forall t \in [0, 1])$$

となる. しかし $S(1) = T(\mathbf{a})$ と $S(0) = T(\mathbf{b})$ なので

$$\begin{aligned} \|T(\mathbf{a}) - T(\mathbf{b})\|_{2,m} &= \left\| \int_0^1 \dot{S}(t) dt \right\| \leq \int_0^1 \|\dot{S}(t)\| dt \\ &= \leq M \|\mathbf{b} - \mathbf{a}\|_{2,n} \int_0^1 dt = M \|\mathbf{b} - \mathbf{a}\|_{2,n} \end{aligned}$$

がわかる. □

定義 A.16. $E \subset \mathbb{R}^n$ を開集合とする. 写像 $T: E \rightarrow \mathbb{R}^m$ が E 上で連続微分可能 (C^1 級) であるとは

$$\dot{T}: E \rightarrow \mathcal{L}(\mathbb{R}^n, \mathbb{R}^m)$$

が連続写像となることである. すなわち $\forall \mathbf{x} \in E$ と $\forall \epsilon > 0$ に対してある $\delta > 0$ があって, $\forall \mathbf{y} \in E$ に対して

$$\|\mathbf{x} - \mathbf{y}\|_{2,n} \Rightarrow \|\dot{T}(\mathbf{x}) - \dot{T}(\mathbf{y})\| < \epsilon$$

をみたすことである.

定理 A.17. $E \subset \mathbb{R}^n$ を開集合とし, $T: E \rightarrow \mathbb{R}^m$ を写像とする. このとき T が E 上で C^1 級であるための必要十分条件は, すべての $i = 1, 2, \dots, m; j = 1, 2, \dots, n$ に対して偏導関数 $D_j T_i$ が存在し, E 上で連続であることである.

Proof. 写像 T は C^1 級とする. すると

$$\dot{T}(\mathbf{x})\mathbf{e}_j = \sum_{i=1}^m (D_j T_i)(\mathbf{x})\mathbf{u}_i$$

から

$$(\dot{T}(\mathbf{x})\mathbf{e}_j | \mathbf{u}_i)_m = (D_j T_i)(\mathbf{x}) \quad (i = 1, 2, \dots, m; j = 1, 2, \dots, n)$$

となる. ただし $(\cdot | \cdot)_m$ は \mathbb{R}^m 上の標準内積である. したがって

$$(D_j T_i)(\mathbf{x}) - (D_j T_i)(\mathbf{y}) = (\{\dot{T}(\mathbf{x}) - \dot{T}(\mathbf{y})\}\mathbf{e}_j | \mathbf{u}_i)_m$$

となる. $|\mathbf{u}_i|_m = |\mathbf{e}_j|_n = 1$ から

$$\begin{aligned} \left| (\{\dot{T}(\mathbf{x}) - \dot{T}(\mathbf{y})\}\mathbf{e}_j | \mathbf{u}_i)_m \right| &\leq |\{\dot{T}(\mathbf{x}) - \dot{T}(\mathbf{y})\}\mathbf{e}_j|_{2,n} \cdot |\mathbf{u}_i|_{2,m} \\ &\leq \|\dot{T}(\mathbf{x}) - \dot{T}(\mathbf{y})\| \end{aligned}$$

となり, $D_j T_i$ は連続であることがわかる.

逆を示す. $m = 1$ の場合を考えれば十分なことに注意する. $\mathbf{x} \in E$ と $\epsilon > 0$ を取る. E は開集合なので \mathbf{x} を中心とした半径 $r > 0$ の開球 B を

$$B \subset E$$

とすることができる. $D_j T_i$ の連続性から r を必要ならばさらに小さく取り

$$|(D_j T_i)(\mathbf{y}) - (D_j T_i)(\mathbf{x})| \leq \frac{\epsilon}{n} \quad (\mathbf{y} \in B, 1 \leq j \leq n)$$

とできる. ここで, $k = 1, 2, \dots, n$ に対して

$$\mathbf{h} := \sum_{j=1}^n h_j \mathbf{e}_j, \quad |\mathbf{h}|_{2,n} \leq r, \quad \mathbf{v}_0 = \mathbf{0}_{2,n}, \quad \mathbf{e}_j = \mathbf{v}_j$$

とおく. このとき

$$T(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x}) = \sum_{j=1}^m [T(\mathbf{x} + \mathbf{v}_j) - T(\mathbf{x} + \mathbf{v}_{j-1})]$$

となる. $|\mathbf{v}_k|_{2,n} < r$ ($k = 1, 2, \dots, n$) で B は凸開集合なので

$$\mathbf{x} + \mathbf{v}_{j-1}, \mathbf{x} + \mathbf{v}_j \in B$$

となる. $\mathbf{v}_j = \mathbf{v}_{j-1} + h_j \mathbf{e}_j$ ($j = 1, 2, \dots, n$) なので中間値の定理から

$$\begin{aligned} T(\mathbf{x} + \mathbf{v}_j) - T(\mathbf{x} + \mathbf{v}_{j-1}) &= T(\mathbf{x} + \mathbf{v}_{j-1} + h_j \mathbf{e}_j) - T(\mathbf{x} + \mathbf{v}_{j-1}) \\ &= h_j (D_j T)(\mathbf{x} + \theta_j h_j \mathbf{e}_j) \\ &\quad (0 < \theta_j < 1; j = 1, 2, \dots, n) \end{aligned}$$

となる. ただし $D_j T = (D_1 T_1, D_j T_2, \dots, D_j T_m)^\top$ である. 以上のことから

$$\begin{aligned} &\left| T(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x}) - \sum_{j=1}^n h_j (D_j T)(\mathbf{x}) \right|_{2,m} \\ &= \left| \sum_{j=1}^n h_j \left\{ (D_j T)(\mathbf{x} + \theta_j h_j \mathbf{e}_j) - (D_j T)(\mathbf{x}) \right\} \right|_{2,m} \\ &\leq \frac{1}{n} \sum_{j=1}^n |h_j| \epsilon = |\mathbf{h}|_{2,n} \epsilon \quad (\forall |\mathbf{h}|_{2,n} < \epsilon) \end{aligned}$$

となる. よって写像 T は点 \mathbf{x} で微分可能で $\dot{T}(\mathbf{x})$ は線型で $\mathbf{h} = \sum_{j=1}^n h_j \mathbf{e}_j$ に対して

$$\dot{T}(\mathbf{x})(\mathbf{h}) = \sum_{j=1}^n h_j (D_j T)(\mathbf{x})$$

となる. さらに

$$\dot{T}(\mathbf{x}) = \begin{bmatrix} \{(D_1 T)(\mathbf{x})\}^\top \\ \{(D_2 T)(\mathbf{x})\}^\top \\ \vdots \\ \{(D_n T)(\mathbf{x})\}^\top \end{bmatrix}$$

となり, $D_1 T, D_2 T, \dots, D_n T$ は連続なので \dot{T} も連続であることがわかる. □

定義 A.18. 写像 $T : \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n$ は次の条件をみたすとする. ある $c < 1$ があって

$$|T(\mathbf{x}) - T(\mathbf{y})|_{2,n} \leq c |\mathbf{x} - \mathbf{y}|_{2,n} \quad (\forall \mathbf{x}, \mathbf{y} \in \mathbb{R}^n)$$

となる. このとき T を \mathbb{R}^n から \mathbb{R}^n への縮小写像という.

定理 A.19. $C \subset \mathbb{R}^n$ を閉集合とし, $T : C \rightarrow C$ を縮小写像とする. このときある $\mathbf{x}_0 \in C$ が唯一存在して

$$T(\mathbf{x}_0) = \mathbf{x}_0$$

をみたす.

Proof. $\mathbf{x}_0 \in C$ を任意に取り点列 $\{\mathbf{x}_k\}_{k=1}^\infty \subset C$ を

$$\mathbf{x}_{k+1} = T(\mathbf{x}_k) \quad (k = 1, 2, \dots)$$

と定める. $k \geq 1$ に対して

$$|\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k|_{2,n} = |T(\mathbf{x}_k) - T(\mathbf{x}_{k-1})|_{2,n} \leq c|\mathbf{x}_k - \mathbf{x}_{k-1}|_{2,n}$$

となる. したがって

$$|\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k|_{2,n} \leq c|\mathbf{x}_1 - \mathbf{x}_0|_{2,n} \quad (k = 1, 2, \dots)$$

を得る. $k < \ell$ に対して

$$\begin{aligned} |\mathbf{x}_k - \mathbf{x}_\ell|_{2,n} &\leq \sum_{i=k+1}^{\ell} |\mathbf{x}_i - \mathbf{x}_{i-1}|_{2,n} \leq \{c^k + c^{k-1} + \dots + c^{\ell-1}\} |\mathbf{x}_1 - \mathbf{x}_0|_{2,n} \\ &\leq \left[\frac{|\mathbf{x}_1 - \mathbf{x}_0|_{2,n}}{1-c} \right] c^k \end{aligned}$$

となる. よって $\{\mathbf{x}_k\}_{k=1}^\infty$ は Cauchy 列であることがわかる. よって C は閉集合であるのである $\mathbf{x} \in C$ があって

$$\lim_{k \rightarrow \infty} \mathbf{x}_k = \mathbf{x}$$

となる. さらに T は縮小写像なので連続である. よって

$$T(\mathbf{x}) = T\left(\lim_{k \rightarrow \infty} \mathbf{x}_k\right) = \lim_{k \rightarrow \infty} T(\mathbf{x}_k) = \lim_{k \rightarrow \infty} \mathbf{x}_{k+1} = \mathbf{x}$$

がわかる. よって定理は証明された. □

定理 A.20. $E \subset \mathbb{R}^n$ を開集合とし, $T: E \rightarrow \mathbb{R}^n$ を C^1 級とする. すなわち \dot{T} は連続で

$$\begin{aligned} T(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x}) &= \dot{T}(\mathbf{x})(\mathbf{h}) + \mathbf{r}(\mathbf{h}) \quad (\forall \mathbf{x} \in E, \mathbf{x} + \mathbf{h} \in E), \\ \lim_{\mathbf{h} \rightarrow \mathbf{0}_n} \frac{|\mathbf{r}(\mathbf{h})|_{2,n}}{|\mathbf{h}|_{2,n}} &= 0 \end{aligned}$$

をみたすことである. さらにある $\mathbf{a} \in E$ に対して $\dot{T}(\mathbf{a})$ は可逆とし, $\mathbf{b} = T(\mathbf{a})$ とおく. このとき以下が成立する.

(1) \mathbb{R}^n のある開集合 U と V で $\mathbf{a} \in U$ と $\mathbf{b} \in V$ なるものがあって

$$T: U \rightarrow V$$

は 1 対 1 で $T(U) = V$ となる.

(2) V 上で定義された T の逆写像を S とする. すなわち

$$S(T(\mathbf{x})) = \mathbf{x} \quad (\forall \mathbf{x} \in U)$$

である. このとき S は C^1 級である.

Proof. (1) $\dot{T}(\mathbf{a}) = A$ とおき, $\lambda > 0$ を

$$2\lambda\|A\| = 1 \tag{A.9}$$

となるように取る. \mathbf{a} を中心とした開球 U が存在して

$$U \subset E$$

とできる. \dot{T} は点 \mathbf{a} で連続なので必要ならば U 半径をさらに小さくすると

$$\|\dot{T}(\mathbf{x}) - A\| < \lambda \quad (\mathbf{x} \in U) \tag{A.10}$$

とできる.

各 $\mathbf{k} \in \mathbb{R}^m$ に対応して関数 φ を

$$\varphi(\mathbf{x}) := \mathbf{x} + A^{-1}(\mathbf{y} - T(\mathbf{x})) \quad (\mathbf{x} \in E) \tag{A.11}$$

と定める. このとき

$$T(\mathbf{x}) = \mathbf{y} \Leftrightarrow \mathbf{x} \text{ は関数 } \varphi \text{ の不動点}$$

に注意する. 簡単な計算から

$$\dot{\varphi}(\mathbf{x}) = I_n - A^{-1}\dot{T}(\mathbf{x}) = A^{-1}(A - \dot{T}(\mathbf{x}))$$

なので (A.10) と (A.11) から

$$\|\dot{\varphi}(\mathbf{x})\| \leq \|A\| \cdot \|A - \dot{T}(\mathbf{x})\| < \frac{1}{2\lambda} \cdot \lambda = \frac{1}{2} \quad (\mathbf{x} \in U)$$

を得る. いま $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2 \in U$ を取る. 中間値の定理から \mathbf{x}_1 と \mathbf{x}_2 を結ぶ直線上の端点以外の点 $\tilde{\mathbf{x}} \in U$ が存在して

$$\varphi(\mathbf{x}_1) - \varphi(\mathbf{x}_2) = \dot{\varphi}(\tilde{\mathbf{x}})(\mathbf{x}_1 - \mathbf{x}_2)$$

と書ける. したがって

$$|\varphi(\mathbf{x}_1) - \varphi(\mathbf{x}_2)|_{2,n} \leq \|\dot{\varphi}(\tilde{\mathbf{x}})\| \cdot |\mathbf{x}_1 - \mathbf{x}_2|_{2,n} < \frac{1}{2}|\mathbf{x}_1 - \mathbf{x}_2|_{2,n} \tag{A.12}$$

となる. よって定理 A.19 から $x \in \bar{U}$ が唯一存在して

$$\varphi(x) = x \Leftrightarrow y = T(x)$$

となる. よって T は \bar{U} 上で 1 対 1 である.

次に $V = T(U)$ とおき $y_0 \in V$ を取る. このときある点 $x_0 \in U$ が唯一存在して

$$y_0 = T(x_0)$$

となる. B を x_0 を中心とした半径 $r > 0$ の開球とする. r を十分小さくすると

$$\bar{B} := \{z \in \mathbb{R}^n; |z - x_0|_{2,n} < r\} \subset U$$

とできる. このとき

$$y \in V \Rightarrow |y - y_0|_{2,n} < \lambda r$$

を示すことができる. V は開集合であることがわかる. そのために y を固定する. すると

$$\begin{aligned} |\varphi(x_0) - \varphi(x)|_{2,n} &= |\{x_0 + A^{-1}(y - T(x_0))\} - x_0|_{2,n} \\ &= |A^{-1}(y - T(x_0))|_{2,n} \\ &\leq \|A^{-1}\| \cdot |y - T(x_0)|_{2,n} = \|A^{-1}\| \cdot |y - y_0|_{2,n} \\ &< \frac{1}{2\lambda} \cdot \lambda r = \frac{r}{2} \end{aligned} \tag{A.13}$$

を得る. $x \in \bar{B}$ のとき

$$\begin{aligned} |\varphi(x) - x_0|_{2,n} &= |\varphi(x) - \varphi(x_0)|_{2,n} + |\varphi(x_0) - x_0|_{2,n} \\ &\leq \frac{1}{2}|x - x_0|_{2,n} + \frac{r}{2} \quad (\because \text{(A.12) と (A.13)}) \\ &\leq \frac{r}{2} + \frac{r}{2} = r \end{aligned}$$

がわかる. これより $\varphi(x) \in B$ となる. さらに $x_1, x_2 \in \bar{B} \subset U$ のとき

$$|\varphi(x_1) - \varphi(x_2)|_{2,n} \leq \frac{1}{2N}|x_1 - x_2|_{2,n}$$

が成立する. よって $\varphi: \bar{B} \rightarrow \bar{B}$ は縮小写像となる. \bar{B} は \mathbb{R}^n の閉集合なので点 $x \in \bar{B}$ が唯一存在して φ の不動点となる. すると

$$T(x) = y$$

をみたすので

$$y \in T(\bar{B}) \subset T(U) = V$$

がわかる. よって (1) が示せた.

(2) $\mathbf{y} \in V, \mathbf{y} + \mathbf{k} \in V$ を取る. すると $\mathbf{x} \in U$ と $\mathbf{x} + \mathbf{h} \in U$ が存在して

$$\mathbf{y} = T(\mathbf{x}), \quad \mathbf{y} + \mathbf{k} = T(\mathbf{x} + \mathbf{h})$$

となる. すると

$$\begin{aligned} \varphi(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - \varphi(\mathbf{x}) &= \{\mathbf{x} + \mathbf{h} - A^{-1}(\mathbf{y} + \mathbf{k} - T(\mathbf{x} + \mathbf{h}))\} \\ &\quad - \{\mathbf{x} - A^{-1}(\mathbf{y} + \mathbf{k} - T(\mathbf{x}))\} \\ &= \mathbf{h} + A^{-1}\{T(\mathbf{x}) - T(\mathbf{x} + \mathbf{h})\} \\ &= \mathbf{h} - A^{-1}\mathbf{k} \end{aligned}$$

となる. よって (A.13) から

$$|\mathbf{h} - A^{-1}\mathbf{k}|_{2,n} = |\varphi(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - \varphi(\mathbf{x})|_{2,n} \leq \frac{1}{2}|\mathbf{h}|_{2,n}$$

となる. したがって

$$|\mathbf{h} - A^{-1}\mathbf{k}|_{2,n} \geq |\mathbf{h}|_{2,n} \times |A^{-1}\mathbf{k}|_{2,m}$$

から

$$|A^{-1}\mathbf{k}|_{2,n} \geq \frac{1}{2}|\mathbf{h}|_{2,n}$$

と

$$|\mathbf{h}|_{2,n} \leq \|A^{-1}\| \cdot |\mathbf{k}|_{2,m} \frac{|\mathbf{k}|_{2,m}}{\lambda} \quad (\text{A.14})$$

を得る. よって (A.13) と (A.14) から

$$\|\dot{T}(\mathbf{x}) - A\| \cdot \|A^{-1}\| < \lambda \frac{1}{2\lambda} = \frac{1}{2}$$

となるので定理 A.10 から \dot{T} は逆写像を持つことがわかる. そこで $\dot{T}(\mathbf{x})$ の逆写像を W と書くと

$$\begin{aligned} S(\mathbf{y} + \mathbf{k}) - S(\mathbf{y}) - W(\mathbf{k}) &= S(T(\mathbf{x} + \mathbf{h})) - S(T(\mathbf{x})) - W(\mathbf{k}) \\ &= \mathbf{x} + \mathbf{h} - \mathbf{x} - W(\mathbf{k}) \\ &= \mathbf{h} - W(\mathbf{k}) \\ &= \mathbf{h} - W\{T(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x})\} \\ &= -W\{T(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x}) - \dot{T}(\mathbf{x})\mathbf{h}\} \quad (\text{A.15}) \\ &\quad (\because W \dot{T}(\mathbf{x}) = I_n) \end{aligned}$$

となる. (A.14) から

$$\begin{aligned} \frac{|S(\mathbf{y} + \mathbf{k}) - S(\mathbf{y}) - W(\mathbf{k})|_{2,m}}{|\mathbf{h}|_{2,n}} &= \frac{|-W[T(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x}) - \dot{T}(\mathbf{x})\mathbf{h}]|_{2,m}}{|\mathbf{h}|_{2,n}} \\ &\leq \frac{\|W\|}{\lambda} \frac{|T(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x}) - \dot{T}(\mathbf{x})\mathbf{h}|_{2,n}}{|\mathbf{h}|_{2,n}} \quad (\because \text{A.15}) \end{aligned}$$

を得る. $\mathbf{k} \rightarrow \mathbf{0}_m$ のとき $\mathbf{h} \rightarrow \mathbf{0}_n$ となり

$$\begin{aligned} \lim_{\mathbf{k} \rightarrow \mathbf{0}_m} \frac{|S(\mathbf{y} + \mathbf{k}) - S(\mathbf{y}) - W(\mathbf{k})|_{2,m}}{|\mathbf{h}|_{2,n}} \\ \leq \lim_{\mathbf{h} \rightarrow \mathbf{0}_n} \frac{\|W\|}{\lambda} \frac{|T(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - T(\mathbf{x}) - \dot{T}(\mathbf{x})(\mathbf{h})|_{2,n}}{|\mathbf{h}|_{2,n}} = 0 \end{aligned}$$

となる. よって

$$\dot{S}(\mathbf{y}) = W$$

がわかる. W は $\dot{T}(\mathbf{x}) = \dot{T}(S(\mathbf{y}))$ の逆写像になうように選んだ. したがって

$$\dot{S}(\mathbf{y}) = \{ \dot{T}(S(\mathbf{y})) \}^{-1} \quad (\mathbf{y} \in V)$$

を得る. □

A.4 連続関数の性質

定理 A.21 (Heine-Borel). $K \subset \mathbb{R}^d$ を部分集合とする. K がコンパクトであるために必要十分条件は, K が閉かつ有界集合であることである.

Proof. □

命題 A.22. $K \subset \mathbb{R}^d$ をコンパクト集合とし, $f \in C(K)$ とする. ただし, $C(K)$ は K 上の実数値連続関数全体のなす集合である. さらに, $M := \sup_{x \in K} f(x)$ とおく. このとき, ある $x \in K$ があって, $f(x) = M$ が成立する.

Proof. □

定義 A.23. $D \subset \mathbb{R}^d$ を部分集合とする. 関数 $f : D \rightarrow \mathbb{R}$ が一様連続であるとは

$$\sup_{\mathbf{x}, \mathbf{y} \in D; |\mathbf{x} - \mathbf{y}|_2, d < \epsilon} |f(\mathbf{x}) - f(\mathbf{y})| \xrightarrow{\epsilon \rightarrow 0} 0$$

が成り立つときをいう.

命題 A.24. $K \subset \mathbb{R}^d$ をコンパクト集合とし, $f \in C(K)$ とする. このとき, f は一様連続である.

Proof. □

定理 A.25 (Dini). $K \subset \mathbb{R}^d$ をコンパクト集合とする. $\{f_n\}_{n=1}^\infty \subset C(K)$ は $f_n \geq 0 (n \in \mathbb{N})$ かつ $f_1 \geq f_2 \geq \dots$ で $f_n(x) \xrightarrow{n \rightarrow \infty} 0 (\forall x \in K)$ をみたすとする. このとき, $\sup_{x \in K} f_n(x) \xrightarrow{n \rightarrow \infty} 0$ となる.

Proof. 固定した $\epsilon > 0$ に対して

$$O_n := f_n^{-1}((-\infty, \epsilon)) = \{x \in K; f_n(x) < \epsilon\} \quad (n \in \mathbb{N})$$

とおく. 関数 f は連続なので, 集合 $O_n (n \in \mathbb{N})$ は開であり, 関数列 f_1, f_2, \dots は減少列なので, $O_1 \subset O_2 \subset \dots$ である. $f_n(x) \xrightarrow{n \rightarrow \infty} 0$ なので, n を十分おおくすると $x \in O_n$ とできる. したがって, $\bigcup_{n=1}^\infty O_n \supset K$ となる. K はコンパクト部分集合であるので, ある $m \in \mathbb{N}$ と $n_j \in \mathbb{N} (j = 1, 2, \dots, m)$ が存在して, $\bigcup_{j=1}^m O_{n_j} \supset K$ となる. ここで, $N = \max\{n_1, n_2, \dots, n_m\}$ とおくと $f_N(x) < \epsilon (\forall x \in K)$ となる. 関数列 $\{f_n\}_{n=1}^\infty$ は減少列なので, $\forall n \geq N$ と $\forall x \in K$ に対して, $f(x) < \epsilon$ となる. したがって

$$\limsup_{n \rightarrow \infty} \sup_{x \in K} f_n(x) \leq \epsilon$$

となる. $\epsilon > 0$ は任意だったので, $\sup_{x \in K} f_n(x) \xrightarrow{n \rightarrow \infty} 0$ がわかる. □

A.5 章末注釈と参考文献